



TITLE:

作用素環上のDynamical Semi-Groupsについて (Hardy空間における線型作用素の研究)

AUTHOR(S):

渡辺, 誠治

CITATION:

渡辺, 誠治. 作用素環上のDynamical Semi-Groupsについて (Hardy空間における線型作用素の研究). 数理解析研究所講究録 1979, 350: 134-147

ISSUE DATE:

1979-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104373>

RIGHT:

作用素環上の dynamical semi-groups について

新潟大・理・ 渡辺 誠治

§1. 序

非可換な作用素環の order structure を解明するには、単なる positive linear map のみを考えたのでは、あまりにも一般的すぎてその深い性質を十分にとらえることができず、そのような状況における自然な対象として completely positive linear map. (C.P. map.) が注目されてきている。さらに C.P. map. は作用素環の本質的な構造理論においても重要な役割りを果すことが明らかになってきている。

一方ある種の C.P. map. の one-parameter semi-group (dynamical semi-group) が、非可逆過程の時間発展を記述するための自然な設定として物理の人々により取り上げられて研究されるようになってきた。

しかしながさくのような直接的、具体的な物理的背景を考えなくても、 \ast -automorphism の one-parameter group を

種々の性質と対比させてみると興味深い。例えば "infinitesimal generator" に関して云えば "norm continuous \ast -automorphism group" の場合は有界な \ast -derivation になるが, unital C.P. map. の norm continuous one-parameter semi-group のそれはどのようにして特徴づけられるか, derivation とのすれがどのような形であらわれるか? が問題となる。

Dynamical semi-group については種々の面から多くの研究がなされているが, 以下では §2. で norm continuous dynamical semi-group の infinitesimal generator の構造について述べ, §3. では ultraweakly continuous dynamical semi-group に対する種々の ergodic Theorems について述べる。

まずはじめに dynamical semi-group の定義をのべる。

[定義.] M を Von Neumann algebra, M_* を M の predual とする。このとき M 上の operator の one-parameter semi-group $\alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}$ は次の (1) (2) (3) を満たすとき M 上の dynamical semi-group とする。

- (1) 各 α_t は M 上の unital normal C.P. map
- (2) $\alpha_0 = I$. (M 上の Identity map)

(3) α : ultraweakly continuous

($\forall \phi \in M_*$ $t \rightarrow \phi(\alpha_t(A))$: continuous $\forall \phi \in M_*$ $\forall A \in M$)

§. 2. Infinitesimal generator の構造

この §. 2 は Von Neumann algebra M 上の dynamical semi-group $\alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}$ が norm continuous のときを考える。このとき $\alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}$ の generator (M 上の bounded linear operator) を特徴づけるため次の定義をおく。[8]

[定義] Von Neumann algebra M 上の linear map L は次の (1)(2) をみたすとき M 上の dissipation という。

$$(1) \quad L(1) = 0, \quad L(A)^* = L(A^*) \quad (A \in M)$$

$$(2) \quad L(A^*A) \geq L(A^*)A + A^*L(A) \quad (A \in M)$$

このとき, dissipation は常に bounded であることが Kishimoto [5] に示されている。

次に $M_n(M)$ を M 上の $n \times n$ matrix algebra とするとき, 任意の $n \geq 1$ に対して,

$$L_n : M_n(M) \rightarrow M_n(M)$$

$$(A_{ij}) \quad (L(A_{ij}))$$

が dissipation を与えるとき L を completely dissipation (C.D.) と云う。

このとき norm continuous dynamical semi-group の generator の特徴づけが得られる。

[定理] (G. Lindblad [8])

$\lambda = \{e^{tL}\}_{t \geq 0}$ が M 上の norm continuous dynamical semi-group なのは L が M 上の ultraweakly continuous completely dissipation のときに限る。

そこで次に completely dissipation L がどのような形で構造を
 しているか が問題になる。

さて $\{e^{tL}\}_{t \in \mathbb{R}}$ が unital C.P. map の norm continuous one-parameter ~~semi~~-gr. なのは L と $-L$ が C.D. のとき、即ち L が $*$ -derivation のときに限る。そしてこれは $\{e^{tL}\}_{t \in \mathbb{R}}$ が norm cont. $*$ -auto. gr. の時に限らない。

一方 M 上の C.P. map π に対して $L_\pi(X) \equiv \pi(X) - \frac{1}{2} \{ \pi(1)X + X\pi(1) \}$ ($X \in M$) とすると L_π は C.D. となり、 $*$ -derivation D に対して $L \equiv D + L_\pi$ とおくと L は M 上の C.D. となる。逆に次のことが問題になる。即ち

[問題④] Von Neumann algebra M 上の任意の C.D. L に対して M 上の C.P. map π と $*$ -derivation D が存在して $L = L_\pi + D$ とできるか?

問題④に対して, Gorini, Kosakowski, Sudarshan [11] が $M = M_n$ (matrix algebra) に対して, Lindblad [8] が separable Hilbert space 上の hyperfinite factor M 上の ultraweakly continuous C.D. に対して肯定的に解決した。さらに Thompson [12] は semi-finite V.N. algebra M 上の ultraweakly continuous C.D. に対してやはり肯定的に解決した。又 Lindblad [9], Evans-Lewis [4], Christensen [1] が問題④より少し弱い形の分解定理を得ている。そしてついに Christensen-Evans [2] は問題④が一般の V.N. algebra M に対して肯定的であることを示した。実は彼らはもっと一般的な次の定理を証明した。

[定理]

\mathcal{A} を Hilbert space H 上で作用している C^* -algebra とする。このとき $\{e^{tL}\}_{t \geq 0}$ を \mathcal{A} 上の unital C.P. map の norm continuous one-parameter semi-group とすると L は次の形にかける。

$$L(A) = L_{\pm}(A) + i[H, A] \quad (\forall A \in \mathcal{A})$$

ここで \pm は \mathcal{A} から $\overline{\mathcal{A}}$ (\mathcal{A} の weak closure) への C.P. map があり $H \in \overline{\mathcal{A}}$, $H = H^*$ にとれる。

[証明の方針]

$$D(X, Y, Z) = L(XYZ) + XL(Y)Z - L(XY)Z - XL(YZ) \\ (X, Y, Z \in \mathcal{A})$$

とおく

$$\sum_{i=1}^n (D(X_i^*, Y_i^* Y_j, X_j) \xi_i, \xi_i) \geq 0 \quad \forall X_1, \dots, X_m \in \mathcal{A}, \quad \forall \xi_1, \xi_2, \dots, \xi_m \in H$$

である。このことから Stinespring の表現定理と同様に

次の (1) (2) (3) を満たす表現 $\pi: \mathcal{A} \rightarrow B(K)$ と bdd. l. map

$V: \mathcal{A} \rightarrow B(H, K)$ が構成できる。

$$(1) \quad D(X, Y, Z) = V(X^*)^* \pi(Y) V(Z) \quad (X, Y, Z \in \mathcal{A})$$

$$(2) \quad V(XY) = \pi(X) V(Y) + \pi(Y) V(Z) \quad (X, Y \in \mathcal{A})$$

$$(3) \quad K = [\pi(X) V(Y) h; h \in H, X, Y \in \mathcal{A}]$$

ここで $[\quad]$ は closed linear span を表わす。

次に $H \oplus K$ 上の \mathcal{A} の表現 $\text{Id} \oplus \pi$ を考え、derivation δ

を $\delta(X \oplus \pi(X)) = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ V(X) & 0 \end{pmatrix}$ により定義する。そしてこの δ

をくわしくしることにより 次の (1)' (2)' を満たす $V \in B(H, K)$ が存在することがわかる。

$$(1)' \quad V \in [V(X)B; X \in \mathcal{A}, B \in \mathcal{A}]$$

$[\quad]$ は ultraweakly closed linear span を表わす。

$$(2)' \quad V(X) = VX - \pi(X)V \quad (\forall X \in \mathcal{A})$$

このとき $\Xi(X) = V^* \pi(X) V$, $D(X) = L(X) - L_{\Xi}(X)$ ($X \in \mathcal{A}$)

とおく。 Ξ は \mathcal{A} から \mathcal{A} への c.p. map, D は \mathcal{A} から \mathcal{A} への

$*$ -derivation となる。□

[注] norm continuous でない場合の generator は unbdd.

dissipation として特徴づけられるが、しかし unbdd. dissipation の細かい構造は知られていない。[cf. 3]。

§3. Ergodic theorems

この§では dynamical semi-gr. に対する種々の ergodic theorems について述べる。

まずはじめに V.N. algebra M 上の dynamical semi-group

$$\alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0} \text{ に対して 積分 } \int_0^T \alpha_t(A) dt \quad (A \in M, T > 0) \text{ を}$$

$$\left\langle \int_0^T \alpha_t(A) dt, \phi \right\rangle = \int_0^T \langle \alpha_t(A), \phi \rangle dt \quad (\phi \in M_*)$$

により定義する。即ち ultraweak topology で積分を考える。

又各 α_t は normal \mathbb{C} -valued \ast -preadjoint を α_{t*} とすると、

$\alpha_* \equiv \{\alpha_{t*}\}_{t \geq 0}$ は M_* 上の positive contraction の strongly continuous one-parameter semi-group となる。

非可換作用素環上の automorphism gr. に対する mean ergodic theorems は Kovács - Szücs [6] 以来多くの人々により、種々の観点から、研究されている。又 non-commutative individual ergodic theorem については最近 E.C. Lance [7], Y. G. Sinai - V.V. Anshelevich [10] が、それぞれ discrete automorphism gr. と quasi-local observal algebra

上の translations の group に対して示している。これは \Rightarrow の ergodic theorems の他に local ergodic theorem も合せて, dynamical semi-group に対して, 以下の様に formulate される。
[13].

[定理1] (平均エルゴード定理)

M, M_* をそれぞれ V.N. algebra と その predual, $\alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}$ を M 上の dynamical semi-group とし, M 上の α -invariant faithful normal state ρ が存在するとする。このとき

(1) 任意の $A \in M$ に対して, $\text{ultrastrong } \lim_{T \rightarrow +\infty} \frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A) dt$
($\equiv E(A)$ とおく) が存在し, $E: M \rightarrow M$ は α の fixed points algebra M^α の faithful normal α -invariant norm one projection となる。

(2) 任意の $\phi \in M_*$ に対して $\text{norm } \lim_{T \rightarrow +\infty} \frac{1}{T} \int_0^T \alpha_{t*}(\phi) dt$ が存在して $E_*(\phi)$ に等しい。ここで E_* は E の predjoint map をあらわす。

[定理2] (個別エルゴード定理)

$M, \alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}, \rho, E$ を定理1におけるものと同じとする。

このとき $M \ni A$ と正数 $\delta > 0$ に対して, M の projection E が存在

して, $\rho(1-E) < \delta$, $\lim_{T \rightarrow +\infty} \left\| \left(\frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A) dt - E(A) \right) E \right\| = 0$ とできる。

[定理3] (局所エルゴード定理)

$M, \alpha = \{\alpha_t\}_{t \geq 0}$, ρ を定理1におけるものと同じとする。

このとき $M \ni A$ と正数 $\delta > 0$ に対して M の projection E が存在して $\rho(1-E) < \delta$, $\lim_{T \rightarrow +\infty} \|(\frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A) dt - A)E\| = 0$ とできる。

[定理1の略証]

ρ に対する GNS representation に \mathbb{R} Hilbert sp. 上の contraction operators の strongly continuous one-parameter semi-gr. の mean ergodic theorem に帰着させる。

$(\pi_\rho, H_\rho, \xi_\rho) \in \rho$ に associate する GNS representation とす。

このとき α_t は Schwarz inequality を満たすことより,

$T_t \pi_\rho(A) \xi_\rho = \pi_\rho(\alpha_t(A)) \xi_\rho$ に H_ρ 上の contraction ops の strongly cont. one-param. semi-gr. $\{T_t\}_{t \geq 0}$ を定義できる。

E を $\{x \in H_\rho \mid T_t x = x \quad \forall t \geq 0\}$ の projection とすると,

$\{T_t\}_{t \geq 0}$ に対する mean ergodic th. より

$$\pi_\rho\left(\frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A) dt\right) \xi_\rho \rightarrow E \pi_\rho(A) \xi_\rho \quad (T \rightarrow +\infty)$$

従って

$$\langle X_1 \xi_\rho, X_2 \xi_\rho \rangle = (E \pi_\rho(A) \xi_\rho, X_1^* X_2 \xi_\rho) \quad (X_1, X_2 \in \pi_\rho(M))$$

は $\pi_p(M)' \xi_p$ (H_p の dense subsp.) 上の bdd. sesqui-linear form になる。故に $\langle X_1 \xi_p, X_2 \xi_p \rangle = \langle Y X_1 \xi_p, X_2 \xi_p \rangle$ なる $Y \in B(H_p)$ が存在する。このときさらに $Y \in \pi_p(M)$ が示せる。故に $Y = \pi_p(A_0)$ なる A_0 を $\varepsilon(A)$ とおくと ε が求める norm one projection になる。

又 $\text{ultrastrong limit}_{T \rightarrow +\infty} \frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A) dt = \varepsilon(A)$ も示せる。

(2) についてはまず $\phi(A) = (\pi_p(A) X_1 \xi_p, X_2 \xi_p)$ ($X_1, X_2 \in \pi_p(M)$) なる ϕ に対して示して、次に ρ が faithful であることに依り、このような形の ϕ が M_* で norm dense なることよりわかる。

[定理 2 の略証]

まず $f \in L(\mathbb{R}^+)$ と $A \in M$ に対し convolution $f * A$ を

$$f * A = \int_0^\infty f(t) \alpha_t(A) dt$$

により定義する。ここで積分は前と同じように ultraweak topology で考える。

[Lemma 1]

$$\text{関数 } f_R(t) \equiv \begin{cases} \frac{2}{\pi} \left(\frac{\frac{1}{R}}{(\frac{1}{R})^2 + t^2} - \frac{R}{R^2 + t^2} \right) & t \geq 0 \\ 0 & t < 0 \end{cases}$$

を考え、 $A_R = f_R * A + \varepsilon(A)$ (ε は定理 1 における

norm one proj.) とおくと $\|A_R\| \leq 3\|A\|$, $A_R \xrightarrow{R \rightarrow \infty} A$

(st*), かつ $\lim_{T \rightarrow +\infty} \left\| \frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A_R) dt - \varepsilon(A_R) \right\| = 0$

[略証]

最後の主張は A_R に f_R を代入して直接に計算すればよい。

$A_R \rightarrow A$ (St^* -) を示すため (π_p, H_p, ξ_p) を p に associate する GNS representation とする。このとき E を定理 1 の証明における projection とすると,

$$\pi_p(A_R)\xi_p = \int_0^\infty f_R(t) T_t(\pi_p(A)\xi_p) dt + E \pi_p(A)\xi_p$$

ここで $\{U_t\}_{t \in \mathbb{R}}$ を $\{T_t\}_{t \geq 0}$ の $K \supset H$ 上の unitary dilation とし,

$U_t = \int_{-\infty}^\infty e^{it\lambda} dE_\lambda$ を $\{U_t\}$ の spectral representation とすると,

$$\pi_p(A_R)\xi_p = P_H \int_{-\infty}^\infty \left[\int_0^\infty f_R(t) e^{it\lambda} dt \right] dE_\lambda \pi_p(A)\xi_p$$

となることかわかり, Fourier transf. の性質より

$$\begin{aligned} \pi_p(A_R)\xi_p &\rightarrow P_H (\pi_p(A)\xi_p - (E_0 - E_{0-\infty}) \pi_p(A)\xi_p) \\ &= E \pi_p(A)\xi_p \end{aligned}$$

となることがわかる。

さらに π_p : faithful, ξ_p : cyclic for $\pi_p(M)'$ であることがより

$A_R \rightarrow A$ (St^* -) がわかる。』

次に証明の key point である次の Lemma 2 が必要である。これは本質的には E. C. Lance [7] にある。又これは non-commutative maximal ergodic theorem と呼ばれる。

[Lemma 2]

Φ を V.N. algebra M 上の normal C.P. map, $p \in M$ 上の Φ -invariant faithful normal state とすると, $M \ni B \geq 0$, $\|B\| = 1$ に対し $M \ni C \geq 0$, かつ存在して $\|C\| \leq 2$, $p(C) \leq 4p(B)$

$\frac{1}{n}(B + \dots + \Xi^{(n-1)}(B)) \leq C \quad (\forall n \geq 1)$ とできる。

証明は [7] における Theorem 2.1, Lemma 5.1, Lemma 5.2 と同様の方法でできる。又この Lemma から 次の Lemma が直ちに得られる。

[Lemma 3] M, α, ρ を定理 2 におけるものとする。このとき $M \ni \forall B \geq 0, \|B\| = 1$ に対して $M \ni C \geq 0$ が存在して $\|C\| \leq 2, \rho(C) \leq 4\rho(B)^{\frac{1}{2}}, \frac{1}{T} \int_0^T Q_t(B) dt \leq C + \frac{1}{T} 1 \quad (\forall T \geq 1)$ とできる。

[定理 2] の略証

$M \ni \forall A$ に対し (Lemma 1 における A_k を考える。このとき $A_k \rightarrow A$ (st*) か $\{A_k\}$: bdd. であるから、非可換 Ito の定理と Lemma 3 より 求める projection E が得られる。□

[定理 3 の略証]

定理 3 の証明の方針も定理 2 の場合と同様で、Lemma 1, Lemma 2 に対応する次の Lemmas が示されればよい。

[Lemma 4] M, α, ρ を定理 1 におけるものとする。

$$f_R(t) = \begin{cases} R & 0 \leq t \leq \frac{1}{R} \\ 0 & 0 > t, \quad t > \frac{1}{R} \end{cases} \quad \text{と置く。}$$

このとき

$M \ni \forall A$ に対して $A_k = f_R * A$ とおくと、 $\|A_k\| \leq \|A\| \quad (k=1,2,\dots)$

$$A_k \rightarrow A \text{ (strongly) } \Rightarrow \lim_{T \rightarrow +\infty} \left\| \frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(A_k) dt - A_k \right\| = 0$$

[Lemma 5] M, α, ρ を定理 1 に於けるものとする。

このとき $M \ni \forall B \geq 0, \|B\|=1$ に対して $M \ni C \geq 0$ が存在して
 $\|C\| \leq 2, \rho(C) \leq 4\rho(B)^{\frac{1}{2}}$ かつ $\frac{1}{T} \int_0^T \alpha_t(B) dt \leq C$
 $(\forall T \in (0, \infty))$ となる。

[注] [定理 1, 2, 3] の証明をくわしく check すれば
 わかるように, dynamical semi-gr. かつ C.P. map. の semi-gr.
 ということは一時的に本質的に用いていない。即ち各 α_t が
 Schwarz inequality を満たせば証明は通用する。
 従って定理 1, 2, 3 は unital normal 2-positive map
 の ultraweakly cont. semi-gr. に対しても成立する。
 又定理 1 に対しては単なる positive map の semi-gr. に対しても,
 弱い形の定理を示すことが出来る。[13]

参考文献

- [1] E. Christensen, Generators of semi-groups of completely positive maps, Preprint.
- [2] E. Christensen and D.E. Evans, Cohomology of operator algebras and quantum dynamical semi-groups, Preprint (1978).
- [3] D.E. Evans, Irreducible quantum dynamical semi-groups,

- Comm.Math.Phys. 54, 293 - 297 (1977).
- [4] D.E. Evans - J.T. Lewis, Dilations of irreversible evolutions in algebraic quantum theory, Comm. Dubl.Inst. Adv. Stud. Ser. A 24 (1977).
 - [5] A. Kishimoto, Dissipation and derivations, Comm. Math. Phys. 47, 25 - 32, (1976).
 - [6] I. Kovács - J. Szücs, Ergodic theorems in Von Neumann algebras, Acta. Sci. Math. 27, 233 - 246 (1966).
 - [7] E.C. Lance, Ergodic theorems for convex sets and operator algebras, Inv. Math. 37, 201 - 214 (1976).
 - [8] G. Lindblad, On the generators of quantum dynamical semi-groups, Comm. Math. Phys. 48, 119 - 130 (1976).
 - [9] G. Lindblad, Dissipative operators and cohomology of operator algebras, Letters Math. Phys. 1, 219 - 224 (1976).
 - [10] Y.G. Sinai - V.V. Anshel'vich, Some problems of non-commutative ergodic theory, Russian Math. Surveys, 31-4, 157 - 174 (1976).
 - [11] E.C.G. Sudarshan, A. Kossakowski and V. Gorini, Completely positive dynamical semi-groups of N-level systems, J. Math. Phys. 17, 821 - 825 (1976).
 - [12] C.W. Thompson, Dissipations on Von Neumann algebras, Comm. Math. Phys. 62, 71 - 78 (1978).
 - [13] S. Watanabe, Ergodic theorems for dynamical semi-groups on operator algebras, Preprint.